



他者と関わる

私たちは誕生してしばらくは、家族が生活時間のほとんどを共にする存在です。しかし、成長とともに家族以外の他者と過ごす時間が増えてきます。

勤めに行くような職業なら、1 日の半分以上は職場の人と過ごすことになるでしょう。また、家を出て一人暮らしをするようであれば、家族と過ごすということ自体がなくなります。

仮に子どもたちが成長し、今の家族と生活を共にしたとしても、他者との関わりを皆無にすることは現実的ではありません。

他者との関わりの中では、自分の思いがうまく伝わらなかったり、軋轢が生じたりすることもあります。時には傷つくこともあるかもしれません。

それでも、関係の修復を図ったり、距離を取ったり、別の新しい関係を築いたりしながら、他者との何らかの関係を構築することで社会を形成しています。

教育基本法第 1 条（教育の目的）には「国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成」という一節が記述されています。子どもたちが学校という社会、他者との関わりを通じて、将来の社会をつくる力を少しずつ蓄え、培っていくことは、とても意義のあることです。

18 世紀のドイツの哲学者カントは「人は人によりて人となる」という言葉を著しています。人は他者との関わりの中で、人間性が育てられるという主旨だそうです。